

敍任賞勳

明治十七年六月廿五日
一等縣官正六位 日下 義雄
兼任農商務大書記官
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 伊東巳代治
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 金子堅太郎
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 荒川 邦藏
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 長井 長義
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 藤原 恭輔
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 榊山 實雄
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 榊山 實雄
兼任農商務大書記官 正六位勳五等 榊山 實雄

時事新報

治外法權撤去ノ直訴
我國ハ今ヤ與國トノ現行條約ヲ改正スルノ機ニ際シ先ツ治
外法權ヲ撤去セザル可ラズトハ我輩ノ最モ嚴望スル所ナリ
ト雖モ十年以來條約改正ノ歴史ニ觀テ其成跡上ヨリ推考
スルニ我輩意中ノ條約改正ハ遺憾ナガラ容易ニ其實行ヲ見
ル可ラザルモノ、如シ然リト雖モ退々又之ヲ再思スルニ彼
ノ治外法權ナルモノハ三十年前別天地ノ遺骸ニシテ爾來皮
肉ノ一變シタル今ノ我日本國ニ成立ス可キモノニ非ズ若シ
モ永ク成立セシムハ僥倖穿窬ノ或ル外國人ニ向テ其奸策ヲ
孕ムノ地ナリ或ハ内外人民ノ間ニ租稅ノ平均ヲ保ツ能ハ
スシテ爲メニ我國ノ稅法ヲ紊亂シ不祥ノ極度ヲ想像スレバ
日本國ノ存亡ニ係ルコトナシトモ云ヒ難シ左レバ我輩ガ今日
ヨリ尋常ノ手續ニテハ其初志通りノ改正ヲ見ル可ラズ
ト承知シテ急言竭論敢テ所見ヲ陳述シ毫モ屈撓スル所ナカ
ラントスルモ事難シ極メテ莊重ナルガ爲メナラニミ
サテ條約改正ノ事ハ我國ト與國全體トノ關係ナリト雖モ目
下コノ與國ノ盟主トモ稱セザレ條約改正ノ局面ニ立テ敢テ
其牛耳ヲ執ルモノハ衆手兼自皆ナ英國ヲ指視スルコトナラン
我輩因テ愛日英國國ノ條約ヲ見ルニ其開卷第一條ニ日本
天皇陛下英國女皇陛下及ビ其繼承ト相互ノ所領臣民ノ間ニ
ハ永遠ノ平和懇親アル可シトアリ此第一條ハ日英條約ノ冒
頭ニシテ其全體ノ精神ヲ包括スルモノナラント雖モ其中鄭
重ニ平和懇親ノ語ヲ掲クルヲ見レバ此條約タル素ト區々ノ
小利ヲ較計スルコト出タルニ非ズシテ兩國臣民ノ便益幸福ヲ
計ルコト出タルコト亦疑ナク容レ可ラズ殊ニ又當時兩國陛下ノ間
ニ贈答往復スル國書親書ニ兩國ノ安寧幸福ヲ祈望スル懇篤
ナル詞意ノ溢ルヲ見テモ兩國交際ノ本旨ノ在ル所ヲ知ル
ニ足ルベシ然レニ彼ノ治外法權ハ其第四條ノ日本ニ在ル英
國臣民ノ間ニ起ル爭論ハ英國官吏ノ裁斷ヲ可シ又其第五
條ノ(前略)日本或ハ外國ノ臣民ニ對シテ惡事ヲ行フ英國ノ
臣民ハ領事或ハ其他ノ官吏之ヲ糾シ英國ノ法律ニ隨テ辨ス
可シ云々トアルニ起ルモノニシテ條約文中ノ一小枝葉タル
ニ過キザルナリ然レニ此小枝葉ノ治外法權ガ今ヤ奇妙ニ害
兆ヲ現ハシ且ツコノ法權下ノ外國人ハ其居留權ノ權限ヲモ

免ル、所アルガ故コ内外人民ノ課稅、輕重ヲ異ニシ財政ノ
料理度ヲ失フテ其影響ノ及フ所ハ或ハ一國ノ存亡ニ關スル
コトナシトモ云フ可ラズ左ナキヤ、奸商其毒ニ匿レテ不盡
ノ惡策ヲ施スニ於テハ爲メ内外ノ交情ヲ冷却シ甚キハ
双方ノ敵意ヲ挑發スルノ恐レナキニ非ズトスレバ右第四
條五條ノ結果ハ正シク第一條ノ精神ニ撞着シテ同時同處ニ
兩立ス可ラザルコト疑ナシ故コ若シ第五條ヲ保存シテ治外
法權ヲ撤去セザレバ條約全體ノ精神タル平和懇親ノ交際ヲ
奈何セシ第一條ヲ沒以シテ之ヲ第四五條ノ犧牲トセンカ是
レ豈ニ與國相交ルノ道ナランヤ乃チ今日コ於テ十分ナル條
約改正ノ必要ナル所以ニシテ光風霽月傲然トシテ兩國交際
ノ精神ヲ誦スルモノハ徒ニ其改正ヲ拒ムコトナカル可シ否、
唯當コ之ヲ贊成シテ與國相交ルノ信義ヲ表シ之ヲ改正スル
ガ爲メコ一臂ノ力ヲ貸スコトナシテ信スルナリ
右ノ次第ナルガ故コ條約改正ノ局面ニ當リ我外交官ノ盡力
ハ今更改正メテ申ス及ハズ各條約代表スル在日本ノ外
交官モ亦其職掌上ニ於テ自他臣民ノ情誼ヲ厚ウスルコトハ條
約改正ノ事ヲ以テ決シテ等閑ニ付セザル可シト雖モ我輩ノ
獨リ怪ム所ハ我國在留ノ外國人等ガ兎角此改正ニ對シテ不
承知ヲ首張ル事ナリ抑モ此外國人ハ何人ゾヤ一時僥倖シ
テ且暮ノ計ヲ爲スモノナル歟法網漏脫シテ不義ノ富貴ヲ
貪ラントスルモノナル歟千百ノ一ハ斯カル人物ナキナリ
我輩ノ來リ懇親平和ニ彼我ノ貿易ヲ營ミ大ニ其富ヲ成サント
スルモノニシテ利害ヲ永遠ニ期シ恰カモ我國ノ農商工社會
ト其盛衰ノ運命ヲ與ニスルモノナリ然レニ今此外國人ハ治
外法權ノ我レニ利ヲアザルヲ見テ之ヲ割愛セントハセザル
角ノ口實ヲ設ケテ其撤去ヲ拒ムガ如キ抑モ何ノ心ゾヤ穿
窬狡猾ナル者ハいざ知ラズ苟モ正當ナル外國人ナラバ我國
人ト共ニ其商業上ノ甘苦ヲ分クザル可ラズ我財以テ索ル、
ハ外國人ノ利ナル可ラズ我商業ノ衰フモノ亦外人ノ福ニ非
ズ治外法權ノ流毒ヨリ我内政ニ不都合ヲ生シテ其影響ノ遠
キモノナレハ居留外國人相率テ法權撤去ヲ拒ムノ意アレ
ハ其外交官モ自然ニ亦之ニ順適スルノ意味ナキナリ期ス可ラ
ズ治外法權撤去ノ遲々タルモ決シテ偶然ニ非ズルナリ
條約改正ノ事ニ關シテ我輩ハ最早徒ニ東京駐在ノ外交官ヲ
責ムルコト欲セズ居留外國人ノ淺見ニ至テハ我輩之レト與
ニ談スルコト欲セズ去リ迎ハコト誠シテ默然トシテ我輩
亦其可ナルヲ見ザルナリ元來條約改正ハ日本全國ノ大事ニ
シテ其利害得失ハ全國人民ニ關スルモノナリ左レバ日本ノ
人民ハ條約改正ノ責任ヲ擧ケテ曾ナク之ヲ我政府ノミニ歸シ
徒ニ手ヲ袖ニス可ラズ果シテ然ラハ其手ヲ出シテ之ヲ何處
ニ下サシ欺我輩請フ試ニ其着手ノ點ヲ示サン抑モ我日本帝
國ガ獨立國ニ似モヤラズ皮肉ニ變シタル今日コ於テ尙舊天

地ノ條約ニ依リ之ヲ改正スルニ苦シムモノハ敢テ他事アル
ニ非ズ我國ハ不幸ニシテ東洋ノ一隅ニ僻在スルガ故コ我有
リノ儘ノ狀態ヲ擧ケテ之ヲ西洋國人ニ示シ其實價ヲ知ラシ
ムルノ便ニ乏シク條約各國ノ帝王統領特ニ與國ノ盟主トモ
稱スル英國女皇陛下ニシテモ身西洋ニ在テ我國ヲ遠望スレバ
東洋路遠ニシテ雲山隔絶シ其音耗亦耳コ入ルヲ稀疎ナルガ
故コ四聰ヲ通シ四目ヲ明カコセザルコトハ非ザルモ尙未ダ其
事情ヲ曲盡セザルノ憾ナシトモ申シ難シ左レバ我々日本人
ハ國內ニ盤伏シテ徒ニ條約改正ノ成ラザルヲ嘆センヨリモ
今日ノ勢ニ於テ迎モ十分ナル改正ヲ望ム可ラズト覺悟シテ
シテ愛國ノ衷情決テ誓テ海外ニ赴キ先ツ與國ノ盟主トモ稱
スル英國女皇陛下ノ恩闕ニ伏シ東洋ナル日本ノ事情ヲ陳
十分ナル條約改正ノ果ヲ今日コ已ニ可ラザル所以ナリ
奉ランコトハ兼テ聰明仁慈ノ聞高キ女皇陛下、如何テ其衷情
ヲ洞察嘉納セザルコトヤハアル、既ニ陛下ノ聰聽ヲ煩ハシ奉
リ又内閣諸卿國會議員其他朝野有名ノ紳士コ就キ細カコ我
事情ヲ陳シテ條約改正ノ贊成ヲ請フキハ六問何ノ處ニカ義
俠ノ徒ナカラン正議ノ士所任ニ相應シテ日本條約改正論ハ
立談ノ頃ニテ能動政治社會ノ輿論ト爲ルコトモアラン我輩
今斯ク述ニ來ラバ世人或ハ之ヲ難シテ外臣私人ノ資格ヲ以
テ外國帝王ニ訴フレバ僥越ノ罪兇ル可ラズト云フモノモア
ラント雖モ非常ノ場合ニハ自カテ非常ノ處置ナル可ラズ
苟モ我日本國ノ爲メニ奮テ此大義ニ任スルモノアア何ッ
其目的ヲ達スルノ方便ナキナ思ヘン且ツ夫レ一國ノ弊端ヲ
防クハ亦自カラ其時機アリ一旦其時機ヲ誤マラバ南面ノ尊
ヲ以テスト雖モ復々之ヲ矯ム可ラズ例ニハ彼ノ英商ガ阿片
ヲ支那ニ輸入スルガ如キ現ニ英國人ニシテ既ニ其非擧タル
ヲ悟リ非阿片會社ヲ創立シテ之ヲ廢棄セントスルモノモア
レハ今ハ既ニ其勢ヲ成シテ之ヲ矯正スル能ハザルニ至レリ
是ニ由テ之ヲ觀ルニ治外法權ノ弊害モ今ハ只其萌芽ヲ見ル
ノミナリト雖モ一旦其弊害重キ致スニ至ラバ最モ畏キコ
ナガラ英國女皇ノ嚴命ニテモ亦之ヲ一掃スル能ハザルコト
モナラン左レバ我々日本人ハ條約改正ノ機正ニ熟シタル今
日ヲ看過セズ、治外法權ノ害漸ク萌ケタル今日ヲ延引セズ
東京ノ改正會議十分ニ整ハズンバ一片ノ丹心缺テ擧テ英國
ニ赴キ「ハツキヤンハム」ノ風潮ニ伏シ直ニ條約改正ヲ訴ヘテ
聰明仁慈ナル「クヰントリヤ」女皇陛下ノ明晰ヲ煩ハスノ覺
悟ナカル可ラザルナリ

成ルテ告グ枝コ
ル朕ガ嘉獎スル
右お付在々木工部
明治十七年四月
於本月本
聖駕親臨ノ榮ア
ノ創設ハ十四年
布設シテ大ニ
面々此ニ操ハ
ラスシテ成功
勉メタルトモ
交通ノ物産ニ
シテ今既ニ此
セテ該社將來
明治十七年
次に社長吉井君
文明ノ美ヲ表
不而シテ其出
世業ヲ振作シ
テ該社ノ布設
テ今復贊辨ヲ
皇政ニ新ノ後
スト雖モ其利
國ノ富強ヲ謀
地方ヲ開シ
社創立ノ大目
來數回ノ討論
得併セテ特許
本社ノ計畫ハ
チ布設シレニ
至ルノ目的
區中乃チ東京
縮ヨリ前橋ニ
畫ノ線路ハ現
キニ在ラント
斯ノ如ク事業
スルハ蓋シ政
皆其道局ノ負
レテ事始メテ
ノ順序ヲ左ニ
東京上野ヨリ
テ起工シ翌十
チ經テ本庄ニ
本庄ヨリ新町
マデ線路ノ全
日ヲ以テ始メ
通シテ全二ヶ
選速ノ差アル
物社員ニ代リ
現ヤ本日開業
下ノ親臨ヲ垂
本社ノ幸蒙リ
情自カラ抑止
貴顯諸公ノ光
ナリトス
至新以來大小
レハ其開業ノ
實ニ我社ヲ以
我社ニ私ニ玉

雜報

○行幸 聖上に之來る三十日午前九時御出門にて市ヶ谷戸
山學校へ行幸遊され諸生徒の体操術を御覽在せ給ふ旨御内
意仰出されたり
○開業式勅語并奉答 日本鐵道會社の開業式に付 聖上臨
御左の勅語あらせ給ふ
勅 語
日本鐵道會社員ノ協同力ヲ效セルニ因リ東京高崎間鐵道